

ニーチェの真理観

Ikeda, Toshihiko / 池田, 俊彦

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

人間環境論集 / 人間環境論集

(巻 / Volume)

1

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

33

(終了ページ / End Page)

39

(発行年 / Year)

2000-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002868>

——ニーチェの真理観——

池田俊彦

真理ないし認識についてのニーチェの思索は、彼の著作の中でまとまった形で遺されているわけでは決してない。彼は哲学においてよくあるような認識論や真理論を展開しているわけではない。しかし、真理ないし認識の問題は彼の生涯を貫く関心事だった。例えば彼の初期には、未完に終り公刊されなかったが、「道徳外の意味における真理と虚偽について」という短い論文が遺されている。中期以降では、彼の著作のほとんどが断章の形式で書かれたことにもよるが、それらの断章のうちに、かつ一八八〇年代の遺された断想のうちに、散らばった形で、真理ないし認識についての思索が展開されている。とくに一八八〇年代の遺された断想のうちでは、力への意志の思想からして論じられているものが見出される。そこで、主に「ツァラトゥストラはこう語った」執筆時期以降の後に書かれた断章や断想において、彼の認識についての思索をさきに検討した。その結果、彼によれば結局、真の認識とされるものは一つの解釈ということだった。以下では、同時期に書かれた断章や断想において、彼の真理についての思索を検討してみたいと思う。

(一)

ニーチェによれば結局、真の認識とされるものは一つの解釈である、ということになる。だから、「真理への意志」とは本質的に解釈の技術である⁽¹⁾と言われる。しかし、「真理への意志とは、固定的なものをでっちあげるごと、真なる・持続的なものをでっちあげるごと、あの偽りの性格を度外視すること、このものを存在するものへと解釈し変えることである。だから「真理」とは、現存する或るもの、見出され、発見されるべ

き或るものではなく、つくり出されるべき或るものであり、一つの過程のための名称の役を果たす或るもの、そのみならず、それ自体終わることのない征服の意志のための名称の役を果たす或るもの、のことである。すなわち、真理を置き入れるのは、一つの無限の過程として、一つの能動的に規定する働きとしてであって、それ自体で固定し確立しているかに見える或るものを意識化することとして、ではない。それは、「力への意志」のための一つの用語である⁽²⁾。このように言われるのも、真理とは認識するものと認識されるそれ自体で存在するものとの一致 (adeequation)、という見解をニーチェがとらないからである。いやそればかりか、彼は真理への接近ということも斥ける。「何らかの方法で近づきうる「真理」があるとは⁽³⁾」「「真理」なるものはないがゆえに、決して真理に近づくとことはない」とされる⁽⁴⁾。そして、「多種多様の眼がある。スフィンクスもまた、眼をもっている。したがって多種多様の「真理」があり、したがっていかなる真理もない」と言われる⁽⁵⁾。あるいは、「真理とは、それなくしては特定種の生物が生きていることができないかもしれないような種類の誤謬である。生にとつての価値が、結局は決定的である。」⁽⁶⁾

というのも、解釈自体は、「生成においては不可能である。それゆえ、いかにしてそれが可能であるのか。自身についての誤謬として、力への意志として、迷妄への意志として」だからである⁽⁷⁾。あるいは、「生成の世界は、厳密な意味では、「概念」され、解釈されえないかもしれない。「概念」し解釈する知性が、全くの仮象性から組み立てられた、しかし確立してしまっているところの、すでにつくりあげられている粗雑な世界を眼前にしているかぎりにおいてのみ、つまり、この種の仮象が生を保存して

きたかぎりにおいてのみ、解釈というがとき或るものが、換言すれば、以前の誤謬とその後の誤謬との相互測定が、あるのである。⁹⁾あるいはまた、「世界の価値はわれわれの解釈のうちにあるということ……これまでの解釈は生のうちで、言いかえれば力への意志のうちで、力の生長への意志のうちで、われわれの自己保存を可能ならしめる遠近法的評価であるということ、人間のあらゆる向上はより狭隘な解釈の超克を必然的に伴うということ、あらゆる強化や力の拡大の達成は新しい遠近法を開き、新しい地平を信ずるにほかならないということ、このことが私の諸著作を一貫している。われわれと何らかの関わりあいをもつ世界は、偽である。言いかえれば、いかなる事実でもなく、諸観察の貧弱を総計のうえに創作され彫琢されたものである。世界は、何か生成するものとして、「真理」なるものはないがゆえに決して真理に近づくことのない絶えず転位してやまない虚偽として、「流れのうちに」ある。」⁹⁾

生成する世界についての解釈は常に、誤謬、虚偽にとどまる。解釈することの本質には、牽強、修正、簡約、省略、充填、捏造、偽造、その他が属する。¹⁰⁾生成する世界についての解釈は常に、仮象、虚構、偽造、創作である。

「定式化されがたいものとしての、「偽」としての、「自己」矛盾するものとしての、生成の世界の性格。解釈と生成とはたがい排除しあう。その結果、解釈は何か別のものとならなければならぬ。すなわち、解釈しうるものたらしめようとする一つの意志が、先行していなければならぬ。一種の生成自身が、存在するものという迷妄をつくりあげなければならぬのである。¹¹⁾「存在するもの」とは、われわれの解釈からして、静止させたもの、持続させたもの、不変化させたものである。したがってまた「存在」は、静止したもの、停滞するものであり、固定的なもの、持続的なもの、持久するもの、不動のもの、自己同等のものであり、さらに、硬直化、永遠化、などとも呼ばれる。こうした「存在するもの」を想定することは、思考し推論しうるために必要である。論理学は、恒常不変なものにあてはまる公式のみを取り扱うからである。このゆえに、こうした想定は実在性を証明する力をまたもってはいない。すなわち、「存

在するもの」はわれわれの光学に属する。¹²⁾だから、精神も、理性も、思考も、意識も、靈魂も、意志も、そうした「存在するもの」とされた虚構である。¹³⁾実体も、事物も、物体も、生起を「存在するもの」の、持続するものの、一種の転位や移転として捉える試みであって、われわれの虚構であり、捏造である。¹⁴⁾

例えば、存在するものとしての「自我」(ego)のみがわれわれにとって唯一の「存在」であり、この唯一の存在に則って、われわれは一切を存在せしめたり、理解しているとされるが、ここには或る遠近法に由来する幻想が働いている。¹⁵⁾つまりここには、すべてのものを一つの地平線のうちへのようにひとまとめに閉じてしまふ、見せかけの統一が働いている。しかし、肉体を手引きとするならば、巨大な多様性がそこにあることは明らかである。生成や発展によって触れられることのない存在するものとしての自我、これは一つの偽造であり、虚構である。同様のことがまた、「主観」の概念についても言われている。「主観」とは、何ら与えられたものではなく、何か仮構されつけ加えられたもの、背後に挿入されたものであり、われわれの立場から解釈されたものである。¹⁶⁾「主観」は、最高の実在感情のさまざまな契機すべての間の統一によせるわれわれの信仰を表わす術語にほかならない。「主観」とは、あたかもわれわれのもつ多くの同等の諸状態は唯一の基体の結果であるかのごとく見なす虚構である。明らかに、自我の場合と同様に、「主観」を存在するものとして実体的統一と見なすこと、および、解釈の原因と見なすことが、拒絶されている。だからまた、こう言われている。「主観を一つだけ想定する必然性は、おそらくない。おそらく多数の主観を想定しても差しかえなく、それら諸主観の協調や闘争がわれわれの思考の、総じてわれわれの意識の、根底にあるのかもしれない。∴主観を多数と見なす私の仮説」¹⁷⁾

存在の世界がまず捏造され、存在するものに価値が与えられることから、生成するものを断罪しそれに不満をおぼえることが由来する。物体も、神も、理念も、そうした「存在するもの」の諸変形であり、捏造されたものにはすぎない。¹⁸⁾法則や、定式も、「存在するもの」という根源的な

虚構の諸変形とされる。つまり認識は、生成を不変的な規則として捉えようとする。変化し転変する生成の世界のうちに、定式化された規則を、法則を、普遍的な不動性を、永遠の持久を、捉えることを目指す。しかし見出された「法則」にとって、新しい生成が常に現われるが、われわれがその新しいものを古いものと比較し同等であるかぎりにおいて、その新しいものを法則という統一の中へと数え入れ、そこでその法則の正しさが証明されたとするにすぎない。あたかも生成のうちにすでに範型があり、その範型が生成を導いており、内在しているかのごとく見なされるが、しかし、たとえどれほどしばしばその法則の正しさが証明されるにしても、これはその法則が「ある」ということを意味してはいない。その法則は、存在の図式にしたがって定式化されたわれわれの解釈にすぎない。その法則は、それを「見出し」、「ある」とするわれわれの、虚構であり、仮象にすぎない。

(二)

生成する世界についての解釈は常に、仮象、虚構、偽造、創作であり、誤謬、虚偽にとどまる。というのをもまた、ニーチェによれば、「遠近法的に (perspektivisch) 観ることしか、遠近法的な解釈しか、存在しない」からである。

「この遠近法的世界、視覚、触覚、聴覚の捉えるこの世界は、はるかに精緻な感覚器官の捉える世界と比較しただけでも、きわめて偽である。しかしこの世界の理解しやすさ、見透しやすさ、その有用さ、その美しさは、われわれの感官が精緻なものにされるや、消えうせ始める。同じく、美も、出来事の経過を省察しつくすときには消えうせる。目的の秩序が、すでに一つの幻想なのである。要するに、皮相的に粗雑に概括すればするほど、世界はますます、価値があり、確定的であり、美しく、有意義であるものに見えてくる。深く立ち入って洞察すればするほど、われわれの価値評価はますます消滅する。すなわち、無意義さが近づいてくる。われわれが、価値をもつ世界をつくりあげたのである。このことを認めつつ、われわれはまた、真理への畏敬がすでに或る幻想の結果であ

ることを、かつまた、真理より以上に、形成し単純化し形態づけ仮構する力を高く評価しなければならぬことを、認める。「すべてのものは偽である。すべてのものは許されている。」眼差しの或る程度の鈍さがあったはじめて、単純化への意志があつてはじめて、美しいものが、「価値多量の」が、生ずる。これらがそれ自体で存在するとしても、私はその何であるかを知らない。」

「真の世界なるものは全く存在しない。したがってそれは、われわれに由来する一つの遠近法的仮象 (perspektivischer Schein) である」とされる。また、目的、統一、存在についても、あるいは、実体、魂などについても、同様のことが言われている。すでに見たように、「自我」の概念の形成には遠近法に由来する幻想が働いている、と言われた。また「主観」の概念も、「見る時の一種の遠近法をもう一度見る行為そのものの原因として定立する」というように捏造されたものである、とされる。さらに、「数は時間や空間と同じく、一つの遠近法的形式である」とされる。「主観と客観」、「能動態と受動態」、「原因と結果」、「手段と目的」も、常にただ遠近法的な諸形式にすぎない。あるいは、「目的と手段」、「原因と結果」、「主観と客観」、「能動と受動」、「物自体と現象」、これらは解釈であつて事実ではないとされる。結局それらは、決してそれ自体である普遍的なものではなく、常にわれわれの一定の視点と一定の角度とから特定の解釈によって形成された捏造、虚構、仮象にすぎない。これらにもとづいた解釈それ自体も、われわれが生成をある一定の視点に制約されて一定の角度から特定の解釈をしているにすぎない。われわれは生成を常に、ある一定の視点から一面的に解釈しているにすぎない。だからこう言われている。「総じて解釈という言葉が意味をもつかぎり、世界は解釈されうるものである。しかし、世界は別様にも解釈されうるのであり、世界は自身の背後にいかなる意味をももつてはおらず、かえつて無数の意味をもっている。——遠近法主義 (Perspektivismus)」。しかもこの解釈の遠近法は、人間の生に根差すものとされ、生に基礎づけられている。すなわち、「あらゆる生の根本条件である遠近法的なもの」と言われている。

解釈が遠近法的であるとは、また、考察して感性的・精神的にわがもとのするときのあらゆる遠近法から離れて、何ものかがある、「それ自体」(Ansich)があるとしても、それを確かめることはできないし、その何であるかを知らないし、そのようなものは存在しない、ということである。⁴⁸あるいは、「自体」(an sich)とされるものは、われわれの想定であり、解釈である、ということである。例えば、事物が性質「自体」をもっているということは、絶対に放棄されねばならない独断的な考え、全くくだらない仮説である。事物という概念そのものと同じく、すべての固有性が、徹頭徹尾、表象し、思考し、意欲し、感覺するものの作品であり、⁴⁹解釈にもとづくものである。また、「いかなる「事実自体」なるものもなく、或る事実がありうるためには、一つの意味が常にまず置き入れられていなければならない。⁵⁰」「事実はず、解釈されなくてはならない。というのも、この事実がそれ自体として、あらゆる物自体と同様に、永遠に思かしくもそこに存立しているからである。」「われわれは事実なるものに、決して突きあたることはない。⁵¹」だから、「現象に立ちどまって、「あるのはただ事実のみ」と主張する実証主義に反対して、私は言うだろう。いや、まさしく事実なるものはなく、あるのはただ解釈のみ、と。われわれは、いかなる事実「自体」をも確かめることはできない。おそらく、そのようなことを欲するのは背理だろう。」さらにまた、こう言われている。「われわれがわれわれの存在に、われわれの論理や心理学的先入見に、還元することのなかった世界は、世界「自体」として現存してはいない。」⁵²

「それ自体であるもの」というのがそれ自身、われわれの解釈である。だから遠近法的な解釈は、それ自体で存在するものを見出し、それとの一致を求めて解釈を行なうのではない。むしろ解釈は、「つくり出されるべき或るもの」⁵³であり、それは生成についての仮象であり、虚構であり、偽造にとどまるが、しかしまた同時に、創造でもある。

(三)

生成する世界についての遠近法的な解釈は常に、誤謬、虚偽にとどまる。それは常に、仮象、虚構、偽造だが、しかしまた同時に、創造でも

ある。ともかくそれゆえに、「多種多様の「真理」があり、したがっていかなる真理もない。」⁵⁴また換言すれば、真理とされるものはすべて真理の偽造、ということになる。いわば認識論的な以上の「真理」についての評価を、ニーチェはしかしさらに根本的に「生」からして評価していく。そしてそれによれば、真理は生にとつての一つの有用な偽造 (eine nützliche Fälschung) ⁵⁵である。

生から評価して、彼は次のように言っている。「われわれの認識装置は、「認識」そのものために設けられているのではない。」⁵⁶「知識や認識の仕方は、それ自身すでに生存の諸条件のもとにある。」⁵⁷「われわれのすべての認識機関や感官は、生の保存・生長の諸条件に關してのみ発達している。」⁵⁸「認識機関が発達する背後に動機としてあるのは、自己保存の有用性であつて、欺かれないうための何らかの抽象的・理論的な欲求などではない。認識機関は、その観察がわれわれの自己保存を満足せしめるよう発達する。」⁵⁹

さきに例えば自我や主観といった概念は、生成を同一化し不変化して一つの存在するものとした偽造であり、虚構であり、捏造である、と言われるのを見た。しかし、概念について一般的にだが、次のように言われている。「概念は、厳密に狭義に人間中心的に、また生物学的に、解されなければならない。或る特定種は、自身を保存しその力を増大させるためには、自身の実在性の構想のうちにかきわめて多くの同一にとどまり算定しうるものを、捉えていなければならない、それにもとづいてこそ、自身のとる態度の範型を構成することができるのである。」⁶⁰

また、「範疇は、それがわれわれにとつて生の条件となっているという意味においてのみ、「真理」である。」⁶¹「理性の諸範疇は、多くの暗中模索をかきねながら、相対的な有用性によつてその真なることが証明されたのであるかもしれない。それらの範疇が、総括され、全体として意識されるに至った時点があつた。また、ひとがそれらを命令した時点が、言いかえれば、それらが命令するものとして作用した時点があつた。そのとき以来それらは、ア・プリオリなものとして、経験の彼岸にあるものとして、拒否しがたいものとして、通用した。とはいっても、それらが表現

しているのは、おそらくは種族や類の特定の合目的性以外の何ものでもないかもしれない。――単にそれらの有用性が、それらの「真理」なのである。⁵⁷⁾

さらにこう言われている。「理性、論理、範疇が形成されるとき、欲求が決定的となっていた。がそれは、「認識する」欲求ではなく、理解し算定しやすくすることを目的として、包摂し図式化する欲求である。……そこで働いていたのは、先在的な「イデア」ではなく、われわれが事物を粗雑にまた同等化して見るときにのみ、事物はわれわれにとって算定し取り扱いやすくなる、という有用性である。」⁵⁸⁾ また、「理性とその諸範疇とへの信頼は、弁証法への信頼は、それゆえ論理学の尊重は、これらのものが生にとつて経験によつて証明すみの有用性をもっていることのみを証明するのであつて、これらのものの「真理」を証明するのではない。」⁵⁹⁾ だからさらに、「論理と理性範疇とのうちに認められるのは、有用性を目的として世界を調整する（それゆえ「原理的」には、一つの有用な偽造をなす）ための手段である。がその代わりに、論理と理性範疇とのうちには、真理の標識があると、もしくは実在性の標識があると、信ぜられた。こう信ぜられたことに、哲学の迷誤はもつている」「真理の標識」とは事実、原理的偽造であるそうした体系の生物学的有用性にすぎなかつた。⁶⁰⁾

こうしてニーチェによれば、真理とは生にとつての一つの有用な偽造である。「真理は何でもつて証明されるのか。高揚された力の感情でもつて。有用性でもつて。不可欠性でもつて。要するに、利益でもつてである。」⁶¹⁾ 真理とは、それなくしては特定種の生物が生きていることができないかもしれないような種類の誤謬である。生にとつての価値が、結局は決定的である。⁶²⁾

真理とされるものはこのように、一つの有用な偽造である。しかしいずれにしても、真理は常に真理の偽造であり、誤謬にとどまる。がそれにもかかわらず、われわれは真理を求める。そこでニーチェはさらに、「真理への意志」(der Wille zur Wahrheit)を問う。ただし、「われわれは、真理への意志がもつ価値を問うた。われわれは真理を欲するといふが、と

ころでなぜむしろ非真理を欲しないのか。なぜ不確実を欲しないのか。なぜ無知をさえ欲しないのか。」⁶³⁾ こう問うて、真理への意志をやはり生から評価していく。

すなわち、「真理への意志」とは本質的に解釈の技術である。それにはやはり、解釈する力が属している。⁶⁴⁾ がしかし、解釈自体は、「生成においては不可能である。それゆえ、いかにしてそれが可能であるのか。自身についての誤謬として、力への意志として、迷妄への意志としてである。」⁶⁵⁾ だから、「これまでの解釈は、生のうちで、言いかえれば力への意志のうちで、力の生長への意志のうちで、われわれの自己保存を可能ならしめる遠近法的評価である。」⁶⁶⁾ しかも、解釈するその意欲の度合は、生における「力への意志の生長の度合いに依存している。」⁶⁷⁾ 解釈は、「力の道具として働く。だから、解釈が力の増大につれて生長することは、明らかである。」⁶⁸⁾ つまり、「力への意志が解釈する。」⁶⁹⁾ 解釈する働きそのものが力への意志の「一形式として」、⁷⁰⁾ 解釈を実現している。

それだから、「真理に達する方法が見出されてきたのは、真理を動機としてではなく、力を動機として、優越したいとの意欲を動機としてである。」⁷¹⁾ 「真理の感覚」は、「汝虚言することなかれ」という道徳性が却下されているならば、別の法廷によつてその合法性を認められなければならない。すなわち、人間保存の手段として、力への意志としてである。⁷²⁾ つまり、「真理」という標識は、力の感情の上昇のうちにある。⁷³⁾ 「真理への意志とは、固定的なものをでつちあげること、真なる・持続的なものをでつちあげること、あの偽りの性格を度外視すること、このものを存在するものへと解釈し変えることである。だから「真理」とは、現存する或るもの、見出され、発見されるべき或るものではなく、つくり出されるべき或るものであり、一つの過程のための名称の役を果たす或るもの、それのみならず、それ自体終わることのない征服の意志のための名称の役を果たす或るもの、のことである。すなわち、真理を置き入れるのは、一つの無限の過程として、一つの能動的に規定する働きとしてであつて、それ自体で固定し確立しているかに見える或るものを意識化する」として、ではない。それは、「力への意志」のための一つの用語である。⁷⁴⁾

つまり、「真理への意志は、いかなる道徳的な威力でもなく、力への意志の一形態である」^①
 この意味でニーチェにゆれば、真理への意志とは、力への意志の一種の形である。あるいは彼は、「生そのものが力への意志である」と語っている。ただなつて、真理への意志は、生そのものを貫く力への意志の一種の形である。だから例えは、真なるものとして一つの解釈を表明する。つまり、「生成に存在の性格を刻印する」と、これが力への最極の類推^②であるように思ふか。

(註)

① Friedrich Nietzsche : Der Wille zur Macht, ausgewählt und geordnet von Peter Gast unter Mitwirkung von Elisabeth Förster-Nietzsche (A. Kröner Verlag, 1964) (Kröners Taschenausgabe, Bd. 78) (以下『W』) Ⅰ, Nr. 585.

② WM, Nr. 552.

③ WM, Nr. 451.

④ WM, Nr. 616.

⑤ WM, Nr. 540.

⑥ WM, Nr. 493.

⑦ WM, Nr. 617 Ⅱ, 460°

⑧ WM, Nr. 520 Ⅱ, 460°

⑨ WM, Nr. 616.

⑩ Friedrich Nietzsche : Zur Genealogie der Moral (A. Kröner Verlag, 1964)

(『Sämtliche Werke in Zwölf Bänden, Bd. VII』 (以下『S』) Ⅲ, Dritte Abh. Nr. 24.

⑪ WM, Nr. 539.

⑫ Friedrich Nietzsche : Die Unschuld des Werdens, Der Nachlass, Zweiter Teil, ausgewählt und geordnet von Alfred Baeumler (A. Kröner Verlag, 1965) (『Sämtliche Werke in Zwölf Bänden, Bd. XI』 (以下『S』) Ⅲ, Nr. 190.

⑬ WM, Nr. 517 Ⅱ, 460°

⑭ WM, Nr. 538, 552, 617, 846. UW, Nr. 99.

⑮ WM, Nr. 517.

⑯ WM, Nr. 480.

⑰ WM, Nr. 631.

⑱ WM, Nr. 517, 617, 634.

⑲ WM, Nr. 517, 518 Ⅱ, 460°

⑳ WM, Nr. 481.

㉑ WM, Nr. 488.

㉒ WM, Nr. 485.

㉓ WM, Nr. 490.

㉔ WM, Nr. 617.

㉕ ibid.

㉖ WM, Nr. 521 Ⅱ, 460°

㉗ GM, Dritte Abh. Nr. 12 Ⅱ, 460°

㉘ WM, Nr. 602.

㉙ WM, Nr. 15.

㉚ WM, Nr. 12.

㉛ UW, Nr. 177.

㉜ WM, Nr. 518.

㉝ WM, Nr. 548.

㉞ UW, Nr. 177.

㉟ ibid.

㊱ WM, Nr. 589.

㊲ WM, Nr. 481 Ⅱ, 460°

㊳ Friedrich Nietzsche : Jenseits von Gut und Böse (A. Kröner Verlag, 1964) (『Sämtliche Werke in Zwölf Bänden, Bd. VII』 (以下『S』) Ⅲ, Vorrede.

㊴ WM, Nr. 473, 602.

㊵ WM, Nr. 559, 560.

- ㊦ WMJ, Nr. 556.
- ㊧ WMJ, Nr. 560.
- ㊨ WMJ, Nr. 556.
- ㊩ GM, Dritte Abh. Nr. 7.
- ㊪ WMJ, Nr. 477.
- ㊫ WMJ, Nr. 481.
- ㊬ WMJ, Nr. 568.
- ㊭ WMJ, Nr. 552.
- ㊮ WMJ, Nr. 540.
- ㊯ WMJ, Nr. 584.
- ㊰ WMJ, Nr. 496.
- ㊱ *ibid.*
- ㊲ WMJ, Nr. 507.
- ㊳ WMJ, Nr. 480.
- ㊴ *ibid.*
- ㊵ WMJ, Nr. 515.
- ㊶ WMJ, Nr. 514.
- ㊷ WMJ, Nr. 515.
- ㊸ WMJ, Nr. 507.
- ㊹ WMJ, Nr. 584.
- ㊺ WMJ, Nr. 455.
- ㊻ WMJ, Nr. 493.
- ㊼ JGB, Nr. 1.
- ㊽ WMJ, Nr. 585.
- ㊾ WMJ, Nr. 617 ¹²⁴⁶°
- ㊿ WMJ, Nr. 616.
- Ⓚ WMJ, Nr. 480.
- Ⓛ *ibid.*
- Ⓜ WMJ, Nr. 643.
- Ⓨ WMJ, Nr. 556.

- ㊦ WMJ, Nr. 455.
- ㊧ WMJ, Nr. 495.
- ㊨ WMJ, Nr. 534.
- ㊩ WMJ, Nr. 552.
- ㊪ WMJ, Nr. 583.
- ㊫ JGB, Nr. 13.
- ㊬ WMJ, Nr. 617.